

## Subordination and Extreme Point Theory

東京電機大工 鶴見和之 (Kazuyuki Tsurumi)

日本大薬 関根忠行 (Tadayuki Sekine)

単位円内で正則な函数の従属操作 (subordination) による函数族の端点の性質は種々与えられている。本講では、これらの性質のいくつかを  $\mathbb{C}^n$  の単位球  $\mathbb{B}$  から  $\mathbb{C}^m$  への正則写像の空間  $\mathbb{H}_{n,m}$  へ拡張する。

### §1 序

1.1.  $\mathcal{X} = \mathcal{X}(\mathcal{J})$  を Hausdorff 位相空間  $\mathcal{J}$  を持つ  $\mathbb{C}$  または  $\mathbb{R}$  上の線形位相空間とする。  $X$  を  $\mathcal{X}$  の部分集合とする。  $X$  を含む最小の凸集合 (i.e.  $X$  を含む凸集合の共通部分) を  $X$  の凸包といい、  $\text{co}X$  と表し、  $\text{co}X$  の閉包をと  $\overline{\text{co}}X$  と表す。

点  $x$  が  $X$  の端点 (extreme point) であるとは、  $y, z \in X$ ,  $x \in (y, z) := \{\alpha x + (1-\alpha)y \mid 0 < \alpha < 1\}$  ならば、  $y = z = x$  となるときである。  $X$  の端点全体を  $\text{ext}X$  と表す。

実線形位相空間  $\mathcal{X}$  の部分集合  $H$  が、  $H = x_0 + S$  ( $S$  は余次元 1 の線形位相空間) と表されるとき、  $H$  を  $x_0$  通る超平面という。部分集合  $X \subset \mathcal{X}$  に対して、超平面  $H$  がとれて、  $X \cap H \neq \emptyset$  で  $X$  が  $H$  の片側に入るとき、  $H$  を  $X$  の支持平面 (supporting plane) といい、  $X$  の入る半空間を  $X$  の支持半空間という。このとき、点  $x \in X \cap H$  を  $X$  支持点という。また、  $X \cap H = \{x\}$  となるとき、  $x$  を  $X$  のむき出し点 (exposed point) という。一般に、むき出し点は端点であるが、逆は成り立たない。  $X$  が compact 集合のときは  $\text{ext}X \neq \emptyset$  である。

次の定理は最も基本的である。

**定理 1** (Krein-Milman の定理).  $X$  を  $\mathcal{X}$  の compact 凸集合とすると、次のことが成り立つ：

$$X = \overline{\text{co}}(\text{ext}X).$$

これより,  $X$  の compact 集合  $Y$  に対して

$$\overline{\text{co}}(Y) = \overline{\text{co}}(\text{ext}Y).$$

1.2. 任意の点  $z := \begin{pmatrix} z_1 \\ \vdots \\ z_n \end{pmatrix} \in \mathbb{C}^n$  に対して,

$\|z\| := \sqrt{(z^*z)} = \sqrt{|z_1|^2 + \cdots + |z_n|^2}$ ,  $\mathbb{B} := \mathbb{B}_n := \{z \in \mathbb{C}^n \mid \|z\| < 1\}$  とおく.  $\mathbb{B}$  から  $\mathbb{C}^n$

への正則写像  $f(z) := \begin{pmatrix} f_1(z) \\ \vdots \\ f_n(z) \end{pmatrix}$  の全体を  $\mathbb{H}_{n,m}$  と表す.  $\mathbb{H}_{n,m}$  に通常のとスカラー積を

導入し, 広義一様収束の位相  $\tau$  を入れると,  $\mathbb{H}_{n,m}$  は局所凸線形位相空間になる.

実数列  $0 < r_1 < r_2 < \cdots < r_k < \cdots \rightarrow 1$  をとる.  $f \in \mathbb{H}_{n,m}$  に対して,

$$\|f\|_{r_k} := \sup \{ \|f(z)\| \mid \|z\| \leq r_k \}$$

とおき,  $f, g \in \mathbb{H}_{n,m}$  に対して,

$$\rho(f, g) := \sum_{k=1}^{\infty} \frac{1}{k^2} \cdot \frac{\|f - g\|_{r_k}}{1 + \|f - g\|_{r_k}}$$

とおくと, Weierstrass および Montel の定理により,  $\mathbb{H}_{n,m}$  は距離  $\rho$  に関して完備な距離空間になり, 位相  $\tau$  と  $\rho$  によって定義された位相とは同値である.

## §2 $\mathbb{H}_{n,m}$ 上の連続線形汎関数

multiindex  $\alpha := (\alpha_1, \cdots, \alpha_n) \in \mathbb{Z}_+^n$ ,  $z := \begin{pmatrix} z_1 \\ \vdots \\ z_n \end{pmatrix} \in \mathbb{C}^n$  に対して,  $|\alpha| := \alpha_1 + \cdots + \alpha_n$ ,

$z^\alpha := z_1^{\alpha_1} \cdots z_n^{\alpha_n}$  とおく. このとき,  $\mathbb{B}$  で正則な函数  $f(z) \in \mathbb{H}_{n,1}$  は同次多項式展開

$$f(z) = \sum_{l=0}^{\infty} P_l(z), \quad P_l(z) = \sum_{\|\alpha\|=l} a_\alpha z^\alpha \quad (l \text{ 次同次多項式})$$

ができ, Biermann-Lemaire の公式により,  $\forall r = (r_1, \cdots, r_n)$ ,  $\|r\| = \sqrt{r_1^2 + \cdots + r_n^2} = 1$  に対して,

$$\lim_{|\alpha| \rightarrow \infty} [|a_\alpha| r^\alpha]^{\frac{1}{|\alpha|}} = 1. \quad (1)$$

$\mathbf{e}_k (k = 1, 2, 3, \dots, m)$  を  $\mathbb{C}^m$  の標準的基底とする. これを用いて,  $f(z) \in \mathbb{H}_{n,m}$  は次の様な同次展開ができる.

$$f(z) = \sum_{k=1}^m \sum_{l=0}^{\infty} P_{kl}(z) \cdot \mathbf{e}_k \quad (P_{kl} \text{ は } l \text{ 次同次多項式}). \quad (2)$$

$F$  を  $\mathbb{H}_{n,m}$  から  $\mathbb{C}$  への線形汎函数とし

$$b(\alpha, k) := F(z^\alpha \cdot \mathbf{e}_k) \quad (3)$$

とおく. このとき, (2) の形の  $f(z) \in \mathbb{H}_{n,m}$  に対して

$$F(f) = \sum_{k=1}^m \sum_{|\alpha|=0}^{\infty} a_{k\alpha} b(\alpha, k) \quad (4)$$

とおき,  $b(\alpha, k)$  に条件

$$\overline{\lim}_{|\alpha| \rightarrow \infty} (|a_{k\alpha} b(\alpha, k)|)^{\frac{1}{|\alpha|}} < 1 \quad (5)$$

を課すと, (1) により  $F$  は  $\mathbb{H}_{n,m}$  上の連続線形汎函数となる. 逆に,  $F$  が  $\mathbb{H}_{n,m}$  上の連続線形汎函数で,  $b(\alpha, k)$  を (3) によって定義すると, 級数 (4) は収束し,  $b(\alpha, k)$  は条件 (5) を満たす. したがって, 次の定理が成り立つ:

**定理 2.**  $F$  を  $\mathbb{H}_{n,m}$  上の連続線形汎函数とすると, 条件 (5) をみたす集合  $\{b(\alpha, k) \mid k = 1, 2, 3, \dots, m; \alpha \in \mathbb{Z}_+^n\}$  がとれ,  $F$  は (4) の形になる. 逆に, 条件 (5) をみたす集合  $\{b(\alpha, k) \mid k = 1, 2, 3, \dots, m; \alpha \in \mathbb{Z}_+^n\}$  に対して, (4) によって定義される  $F$  は  $\mathbb{H}_{n,m}$  上の連続線形汎函数である.

[注] 定理 2 は [1] の定理 4.3 の  $\mathbb{C}_n$  への拡張である.

**定理 3** ([1], p.44).  $A$  を  $\mathbb{H}_{n,m}$  の compact 集合とし,  $F$  を  $\mathbb{H}_{n,m}$  上の連続線形汎函数とする. このとき, 次のような  $f \in A$  が存在する.

$$\operatorname{Re} F(g) \leq \operatorname{Re} F(f) \quad (g \in A)$$

また, 次のような  $h \in A$  がとれる:

$$|F(g)| \leq |F(h)| \quad (g \in A).$$

Kline-Milman の定理により, 次の定理が成り立つ

**定理 4** ([1], p.45).  $A, F$  は定理 3 におけるものとする. このとき, 次のものが成り立つ:

$$\begin{aligned} & \max \{ \operatorname{Re} F(f) \mid f \in \overline{\operatorname{co}} A \} \\ &= \max \{ \operatorname{Re} F(f) \mid f \in A \} \\ &= \max \{ \operatorname{Re} F(f) \mid f \in \operatorname{ext}(\overline{\operatorname{co}} A) \}. \end{aligned}$$

§3.

$$\mathcal{P}_l := \left\{ \mathbb{P}_l(z) = \sum_{k=1}^m P_{kl}(z) \cdot \mathbf{e}_k \right\}$$

(ただし, 各成分は  $l$  次の同次多項式, または 0 ではあるが全部は 0 でない)

$$\|\mathbb{P}_l(z)\| := \left\{ \sum_{k=1}^m |P_{kl}(z)|^2 \right\}^{\frac{1}{2}}$$

$$M(\mathbb{P}_l) := \{z \in \bar{\mathbb{B}} \mid \|\mathbb{P}_l(z)\| = \max_{y \in \bar{\mathbb{B}}} \|\mathbb{P}_l(y)\|\}$$

とおく. このとき, 最大値の原理により,  $M(\mathbb{P}_l) \subset \partial\mathbb{B}$ .

$f(z) \in \mathbb{H}_{n,m}$  に対して

$$f(z) = \sum_{l=0}^{\infty} \mathbb{P}_l(z), \quad \mathbb{P}_l \subset \mathcal{P}_l \quad (6)$$

とし,  $l_0$  を  $\mathbb{P}_l(z) = 0 (l = 1, 2, \dots, l_0 - 1), \mathbb{P}_{l_0}(z) \neq 0$  とする. いま,  $z_0 \in M(\mathbb{P}_{l_0})$  をとり,  $U_{\mathbb{P}_{l_0}}$  を次の様な  $m$  次の unitary 行列とする:

$$U_{\mathbb{P}_{l_0}} \cdot \mathbb{P}_{l_0}(z_0) = \begin{pmatrix} M_0 \\ 0 \\ \vdots \\ 0 \end{pmatrix}, \quad M_0 := \max_{y \in \bar{\mathbb{B}}} \|\mathbb{P}_{l_0}(y)\|.$$

このとき,  $\forall g(z) = \sum_{l=0}^{\infty} \mathbb{Q}_l(z) \in \mathbb{H}_{n,m} (\mathbb{Q}_l \in \mathcal{P}_l)$  に対して  $L_f$  をベクトル  $U_{\mathbb{P}_{l_0}} \cdot \mathbb{Q}_{l_0}(z_0)$  の第 1 成分をとるものとする,  $L_f$  は  $\mathbb{H}_{n,m}$  上の連続線形汎関数となる.

次に,  $f(z), g(z) \in \mathbb{H}_{n,m}$  とする.  $g(z)$  が  $f(z)$  に従属 (subordinate) であるとは, 正則写像

$$\Psi(z) : \mathbb{B} \longrightarrow \mathbb{B}, \quad \|\Psi(z)\| \leq \|z\| \quad (z \in \mathbb{B}) \quad (7)$$

がとれて,  $g(z) = f(\Psi(z))$  となるときである.  $f(z)$  に従属なる写像全体を  $s(f)$  と表す.

次の定理が成り立つ:

**定理 5.**  $f(z) \in \mathbb{H}_{n,m}$  とする.

$$\mathcal{A} := \{g(z) \mid g(z) = f(\Psi(z)), \Psi(z) \text{ は (7) をみたし, } \Psi(z_0) \in M(\mathbb{P}_{l_0})\},$$

$$\mathcal{B} := \{g(z) = f(Uz), U : \text{unitary 行列}\}$$

とおくと,

$$\text{ext}(\overline{\text{co}}(s(f))) \cap \mathcal{A} \neq \emptyset, \quad \text{ext}(\overline{\text{co}}(s(f))) \supset \mathcal{B}.$$

(証明) 条件 (7) より,  $\Psi(0) = 0$ . したがって,  $\Psi$  は次の様に展開ができる:

$$\Psi(z) = Az + B_2(z) + B_3(z) + \cdots$$

ただし,  $B_k(z) \in \mathcal{P}_k$ ,  $A$  は  $n$  次正方行列で

$$\|A\| = \sup_{0 < \|z\| < 1} \frac{\|Az\|}{\|z\|} \leq 1.$$

また, (6) より

$$\begin{aligned} g(z) &= f(\Psi(z)) = \sum \mathbb{P}_l(\Psi(z)) \\ &= \mathbb{P}_0 + \mathbb{P}_{l_0}(\Psi(z)) + \mathbb{P}_{l_0+1}(\Psi(z)) + \cdots \\ &= \mathbb{P}_0 + \mathbb{Q}_{l_0}(z) + \mathbb{Q}_{l_0+1}(z) + \cdots \end{aligned}$$

$\mathbb{P}_{l_0}(z), \mathbb{Q}_{l_0}(z) \in \mathcal{P}_{l_0}(z)$  とすると,

$$\mathbb{Q}_{l_0}(z) = \mathbb{P}_{l_0}(Az)$$

となり,

$$\|\mathbb{Q}_{l_0}(z)\| = \|\mathbb{P}_{l_0}(Az)\| \leq \|A\|^{l_0} \|\mathbb{P}_{l_0}(z)\|.$$

したがって,  $\max_{z \in \mathbb{B}} \|\mathbb{Q}_{l_0}\| = \max_{z \in \mathbb{B}} \|\mathbb{P}_{l_0}\|$  となるのは,  $\|A\| = 1$  となるときである。特に,  $A = U$  (unitary) ならば,  $\|A\| = \|U\| = 1$ .  $f$  に対して,  $L_f$  をとり,  $M := \sup \{\text{Re}L_f(g) \mid g \in s(f)\}$  とおく.

$\overline{s(f)}$  は  $\mathbb{H}_{n,m}$  で compact であるから, 定理 4 により, 次の条件をみたす  $h \in s(f)$  がとれる:

$$\text{Re}L_f(h) = M,$$

$$h(z) = f(\Psi(z)) \text{ for some } \Psi(z) \text{ with } \Psi(z_0) \in M(\mathbb{P}_{l_0}).$$

したがって, この  $h$  に対して,  $h \in \mathcal{A}$ ,  $h \in \text{ext}(\overline{\text{co}}(s(f)))$ .

$g(z) \in \mathcal{B}$  とする.  $g(z) = \alpha h_1(z) + (1 - \alpha)h_2(z)$   $0 < \alpha < 1$ ,  $h_1, h_2 \in \overline{\text{co}}(s(f))$  とすると,  $g(z) = f(Uz)$  ( $U$ : unitary 行列),  $h_1, h_2 \in s(f)$  としてよいから,

$$f(Uz) = \alpha f(\Psi_1(z)) + (1 - \alpha)f(\Psi_2(z))$$

( $\Psi_1, \Psi_2$  は条件 (7) をみたす写像)

と表されるから, 一致の定理により,  $\Psi_1(z) = \Psi_2(z) = z$  となり,  $h_1 = h_2 = g$ . したがって,  $\text{ext}(\overline{\text{co}}(s(f))) \supset \mathcal{B}$ .

$f \in \mathbb{H}_{n,m}$  に対して,

$$M_p(r, f) := \left\{ \frac{1}{\sigma(\partial\mathbb{B})} \int_{\partial\mathbb{B}} \|f(r\xi)\|^p d\rho(\xi) \right\}^{\frac{1}{p}}$$

( $d\sigma : \partial\mathbb{B}$  の面素,  $0 < r < 1, 0 < p < \infty$ ),

$$\|f\|_p := \sup_{0 < r < 1} M_p(r, f),$$

$$\mathbb{H}^p := \{f \in \mathbb{H}_{n,m} \mid \|f\|_p < \infty\},$$

$$\mathcal{B}(\mathbb{H}^p) := \{f \in \mathbb{H}^p \mid \|f\|_p < 1\}$$

とおくと, 次のことが成り立つ:

**定理 6([2]).**  $f \in \mathbb{H}^p$  に対して

$$\overline{\text{co}}(s(f)) \subset \mathbb{H}^p.$$

**定理 7([2]).**  $1 \leq p < \infty$  に対して

$$\text{ext}(\mathcal{B}(\mathbb{H}^p)) = \{f \in \mathcal{B}(\mathbb{H}^p) \mid \|f\|_p = 1\}.$$

## 参考文献

- [1] D. J. Hallenbeck and T. M. MacGregar: Linear Problems and Convexity Techniques in Geometric Function Theory, Pitman Advanced Publishing Program(1983).
- [2] D. J. Hallenbeck and K. T. hallenbeck: Extreme Points and Support Points of Subordination Families, Jour. of Math. Analysis and Applications, 251(2000) 157-166.
- [3] G. Kothe: Topological Vector Spaces I, Grundlehren der Math. Wisseusehaften, 159, Springer Verlag (1959).
- [4] W. Rudin: Function Theory in the unit Ball of  $C^n$ , G.M.W., 241, Springer Verlag(1980).

**Kazuyuki Tsurumi**

*Mathematics*

*Tokyo Denki University*

*2-2, Nisiki-cho, Kanda, Chiyoda-ku*

*Tokyo, 101-8457, Japan*

*E-mail:tsurumi@cck.dendai.ac.jp*

**Tadayuki Sekine**

*Office of Mathematics*

*College of Pharmacy*

*Nihon University*

*7-1 Narashinodai 7chome, Funabashi-shi*

*Chiba, 274-8555, Japan*

*E-mail:tsekine@pha.nihon-u.ac.jp*